

発達障害・ 自閉症医療の最前線

現代の社会問題とも言われる「発達障害バブル」。
誰もが自閉症の素因を備え、乳児期から老年期に至るまで
幅広い年齢層での診断が急増する、
新たな自閉症の時代に突入した今日では、
「先天性の脳疾患」という概念にとらわれた対症薬物療法や
療育・発達支援だけでは解決し得ない、
根本原因の異なる多因子が交錯する発達障害の
近未来医療について展望する。

統合医療センター福田内科クリニック

福田克彦



今世紀は新たな「自閉症の時代」

自閉症は、母原病と言われる家系や脳の異常にかかわる遺伝による、不治の脳機能障害なのか? 「療育」の名の下の積極的な教育支援や医療の介入によって、過敏や認知の特性、神経多様性による社会性障害を、矯正・治療する意味はあるのか? また、自閉症はワクチンや環境汚染など母子ぐるみの犠牲者なのか?

神経学的多様性が叫ばれる中、エビジェネティックな（環境によって変化する）遺伝子プログラミング障害としてのメタボローム解析^{*1}やケミカル・インバランス^{*2}の是正などのバイオメド医療は、親や医師の欲求を満たすだけの社会工学実験に過ぎないのではないか? そもそも、誰にでもある自閉の兆候を、欧米に倣いアイデンティティーの拠り所や治療義務として、社会的に発達障害とカテゴライズする意味はあるのか?

自閉と非自閉の境界は曖昧であり、現代人は誰もが皆、自閉的素因を備えている。自閉症は単一の障害ではなく集合体の概念である。発達障害は医療・教育・福祉レベルを超えた社会現象であり、遺伝的理論と環境要因などが複雑に関与し、根本原因が不明の多因子疾患である。

^{*1} 生体内に存在する代謝産物を網羅的に解析すること。
^{*2} 脳内化学物質のバランスの崩れ。

自閉症の歴史

自閉症 (Autism) という言葉は、もともとギリシャ語

の「autos (自己)」に由来し、1911年にスイスの医学者オイゲン・プロイラーによって、統合失調症とは切り離れた「個人の幻想の世界に引きこもる」ことを意味していた。19世紀以来、「反復強迫」というフロイトの概念から、精神病理としての神経症とされ、自閉症という概念は20世紀半ばに誕生、やがてドイツの医学者、エミール・クレペリンらの生物学的決定論から、脳のスペックや特定形質を起源とする変質学説に至り、劣等種の根絶といった社会思想へと発展していった。

優生思想が跋扈^{ばっこ}していた1943年に、アメリカの医学者レオ・カナーは、出生児の潜在的障害が劣悪な養育によって乳幼児期に発症する、まれでユニークな感情の接触障害として「自閉症スペクトラム」を報告し、翌年にはオーストリアの小児科医ハンス・アスペルガーが、言語発達は良好で自身の好奇心を満たす関心事に埋没する反面、家族や友人と触れ合えない若者を「アスペルガー症候群」として報告した。

自閉症には当初、カナーらが唱えた「毒親仮説」^{しつけ}「冷蔵庫マザー」と呼ばれる冷淡・厳格な躾や悪魔のような養育環境が心的不安を引き起こすという根強い「母原病」の観念があった。

後にアメリカの心理学者バーナード・リムランドらによって、自閉症は幼児期のトラウマが引き起こす情緒障害や心因性疾患ではなく、ケアやサポートを要する先天的な知覚能力低下などの遺伝的産物であり、非

凡な才能を持った両親の下で過剰な期待を持って愛情深く尽くす育児家庭での発症や、環境要因の関与も示唆され始めたことで、崩壊した不幸な家庭に起因すると烙印を押された母親たちの罪悪感の重荷が解放された。

このように、自閉症は子供時代の悲劇的な養育による破滅的状态ではなく、成人期発症の自閉症例も報告されるようになり、後に「対人的相互関係の障害」「言語発達の異常」「反復常同時・執着的行動」が生後3年以内に見られる場合を自閉症と定義された。

今日、初診年齢が高いほど知的障害を伴う割合が高いASD（自閉症スペクトラム）の診断は、2歳以下でも可能となり、DSM（精神障害の診断と統計マニュアル）やICD（国際疾病分類）などの定義の拡大解釈や総合的診断技術の進歩、社会的関心や個人的感度の増加により、知的障害のない自閉症罹患率は30人に1人に、また2割の学生に学習障害が見られ、ADHD（注意欠如・多動症）は2割の成人に影響を与えている。

近年の研究から

創薬化学に基づいた最新の診断・統計マニュアル（DSM-V）では、神経発達障害の一部として自閉症を分類し、生物学的病因を加味した二大兆候を「社会コミュニケーション障害と対人関係の欠陥」「興味の限局、反復的行動」と定義し、アスペルガー症候群を社会不安障害の一つとして自閉症から除外。ASDとは異なる概念として、SCD（社会的コミュニケーション障害）が設けられた。

これに対してアメリカ国立精神保健研究所（NIMH）は、症状だけのラベリングでは最善の治療には結びつかないとDSMを批判し、Research Domain Criteria（RDoC:研究領域基準）プロジェクト^{*3}では、遺伝子・画像・神経科学や認知行動科学を取り入れた診断分類手法を提唱している。

我が国では欧米諸国に比べてASD、発達性読み書き障害、協調運動障害などの早期発見・早期対応が遅れており、トレーニング資源が乏しく、引きこもりや

不登校・うつなど二次的併存障害への対応や、成人期の移行症例における社会性支援が不十分である。成人期の難治性ADHDには、てんかんやレビー小体型認知症の合併が高頻度に見られている。

運動協調の困難さや動作の拙劣、道具使用での不器用さなど、発達性協調運動障害を取り沙汰される今日の自閉症教育においては、健常者レベルにまで発語や知識習得などの社会性向上を目指すよりも、当事者の生活圏を脅かすことなく閉ざされた意思を読み取れる、非言語コミュニケーション能力を習得すべき代弁者の教育のニーズが高まっている。

かつては、特徴に定義された行動学的観察によって自閉症と診断されていたが、近年は機能性医学の名の下での生物学的マーカーが指標として用いられるようになってきた。口腔・腸内細菌叢・神経内分泌や遺伝・感染・環境による多因子疾患としては、酸化ストレスや免疫・ミトコンドリア機能障害、体内の有害微生物や重金属汚染、SNPs（一塩基多型）など遺伝子変異を制御するメチレーション機能^{*4}の異常が注目されている。

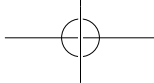
MTHFrやCOMTなどSNPs異常による遺伝体質や、ダウン症候群などの染色体異常、受精後の遺伝子変異と自閉症の関連性など、症候性自閉症の多くは単一遺伝子疾患が関与するも、大部分の非症候性自閉症には多因子遺伝が関与している。

^{*3} NIMHによって構想され開発されている計画。遺伝学、神経科学、行動科学のような近代的な研究手法に基づく精神障害の分類法を作る試み。
^{*4} メチル基を物質に与える反応を「メチレーション」と言う。メチレーションは体内のさまざまな機能にかかわっており、メチレーションが正常に作動することが健康につながる。

考えられる環境要因

自閉症の環境要因としては、母親の麻疹^{はしか}・風疹^{ふうしん}・ムンプス（おたふくかぜ）・ヘルペス・梅毒・サイトメガロウイルスやサリドマイド・バルプロ酸・メチルチアゾリンへの暴露、ワクチンなどに含有する水銀や魚介摂取によるメチル水銀、グリホサートなどの農業によって遺伝子の転写^{*5}がエビジェネティックに変化を起こす。

遅延型も含めた食物アレルギー、寄生虫の異常増殖、銅・鉛など有害金属、マイコトキシン^{*6}の蓄積、鉄・亜



鉛・マグネシウム・セレン、各種ビタミン欠乏、セロトニン・ドーパミン低値、ノルアドレナリン・ヒスタミン高値と低メチル化、グルタチオン・システイン・メタロチオネインの減少などによるリーキーガット症候群^{*7}、SIBO（小腸内細菌異常増殖）での消化不良や排便異常では、適切な栄養摂取や解毒療法が必要となる。

さらに産業公害による有毒化学物質への暴露や、スマートメーター、太陽光パネル、60GHz・5G電磁場環境など、生活環境の急速な変化による毒性物質の蓄積や電磁波障害と自閉症の関与が指摘されている。

^{*5} DNAの情報をRNAへと写し取ること。
^{*6} カビの二次代謝産物として産生される毒の総称。
^{*7} 腸から漏れ出した物質が疾病を引き起こす状態。

期待される自然療法の可能性

ASDにおける常同行動、限定的興味、中立表情の固定、感覚・コミュニケーション障害に対しては、未承認薬であるオキシトシン経鼻噴霧の有効性が報告されている一方、70%の小児に投与されているADHD治療薬は暫定的な症状隠蔽効果が見られるものの、学業成績改善にはつながらず、根治的治療としては期待されていない。また、2004年より施行された発達障害者支援法による総称したカテゴリーが定着するも、支援制度による制約がかえって自立的な生活や自由な職業選択などの社会性獲得の障壁になるケースが見られている。

ラテン系の家族においては、自閉症の子供を授かることは試練というより「神からの祝福」という肯定的なメッセージであると言われる。インドでは、アーユルヴェーダやホメオパシーが医療として確立されており、アーユルヴェーダでは、アグニ（消化酵素）の産生、栄養吸収や免疫力を高めるナガラ胡椒などのトリカトゥ（ブレンドスパイス）や、腸内フローラを改善するギー^{*8}を自閉症に勧めている。また、痙攣や不穏などには、中枢神経の鎮静効果があるブラフミーやアシュワガンダの内服、ブラフミータイラなどの頭部や全身のマッサージの効果のほか、シータリープラーナヤーマ^{*9}やTM瞑想（超越瞑想）^{*10}の効果が報告されている。

漢方医学では、自閉症における情動・行動障害にお

いて、気血虚・肝気鬱結などの肝鬱気滯では、疏肝解鬱などでの緊張緩和・肝気調節や補陰血作用のある大柴胡湯・四逆散などが、また、脾気虚・肝胃不和など脾虚や睡眠障害などの心神不養には甘麦大棗湯、衝動性や過緊張・コミュニケーション障害・知覚過敏などには抑肝散などの有効性が報告されている。



キネシオロジーにアロマセラピーの要素を取り入れたブレンドオイル

による不安感の軽減やリラックス効果、睡眠の改善が報告されている。そのような中、キネシオロジーにアロマセラピーの要素を取り入れた「キネシアロマ」では、自閉症親子のストレスを緩和し、生きている身体感覚を取り戻すアロマブレンドオイルや、もどかしく菌がゆい気持ちを癒やすオリジナルブレンドオイルなど（写真1）により、アロマと東洋医学の融合が実証されている。

現在、COVID-19感染症状治療に関する70数カ国のプロジェクトが進行中のLMHI（Liga Medicorum Homoeopathica Internationalis）では、各国のさまざまな自閉症症例に対して、綿密なカウンセリングが行われ、イギリスやEU諸国の薬局法に基づき厳正に製造されたレメディが、アグラベーション（症状の悪化）や薬物治療の副作用管理が可能なホメオパシー医師によって投与されている（表1）。

^{*8} 無塩発酵バターを煮詰めて、水分やタンパク質、糖分などを取り除いた高純度のオイル。
^{*9} 身体の熱を下げ気分を落ち着かせる呼吸法。
^{*10} ヒンズー教に由来するマントラ瞑想法。

医療の最前線では

自閉症においては腸内細菌叢の多様性が失われ、腸脳相関の不均衡を来しやすい。腸内フローラ移植

ADHDと診断された女兒らは、アロマセラピーやマッサージによってアルファ脳波優位となり、心理評価・血清BDNF値や唾液コルチゾールなどの神経生理学的指標の改善のほか、エッセンシャルオイル



The RASHA Morphogenetic Harmonizer SystemによるFMT菌液の構造化

に従い、独語や情動不安・痼癢や軟便、アトピー症状などの改善が報告されている。当院ではさらにBowel Nosode（腸内細菌のレメディ）の併用や、目的菌・症状別に菌液をキントン水^{*11}などで構造化することで便移植の効率を高めている（写真2）。

幼少期の対処が遅れた成人期の自閉症においても、臓器特異性のあるCNS（中枢神経系）ペプチドや松果体ペプチドなどのPSC（前駆幹細胞）と、マクロファージ活性化因子GcMAF Forteなど（写真3）の併用療法は、神経・内分泌系などに影響を与える免疫増強剤として有用である。

さらにNikola Tesla、Antoine Priorie'、Dr.Royal Rifeらのテクノロジーを集結した The RASHA

GcMAF ForteとCNSペプチド



The RASHA Morphogenetic Harmonizer System

	Calc-p.	Calc.	Bar-c.	Tub.	Agar.	Lyc.	Med.	Thu.j.	Cart.	Phos.	Sulph.	Zinc.
Total Rubrics Kingdoms	19	21	18	14	18	17	16	12	11	15	14	11
Rajan's Miasms	8	7	7	8	6	6	7	7	5	6	6	6
generalities; DEVELOPMENT arrested (90)	4	3	3	1	4	3	3	3	3	3	3	1
mind; AUTISM, mutinism (13)			1	1		3		1				
mind; LEARNING; difficult (115)	3	3	4	1	4	3		1	1	3	3	4
mind; TALK, talking, talks; slow, late learning to (32)	3	3	3	1	4		2	3	1	3	1	
mind; IMBECILITY; children, in (16)	3	3	3	1		1	3		3		3	1
mind; ACTIVITY; hyperactive (67)	1	3		3	2		3				3	3
mind; PRECOCITY (64)	1	3		3	1	3	3	1	1	3	1	
mind; CONCENTRATION; difficult; children, in (13)			3						1			1
mind; SCHOOL, aversion to (33)	3							2				
mind; RESTLESSNESS, nervousness; children, in (120)	1	3	1	3	3	4	2	1	1		3	1

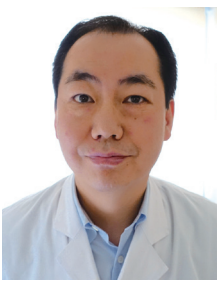
表1 / 発達障害におけるレパートリゼーション（症例分析）の一例

Morphogenetic Harmonizer System（写真2,4）は、スカラー波^{*12}およびRife周波数^{*13}を発生し、形態形成暗号化格子を再プログラミングすることでジャンクDNA変異を修復し、体内の損傷細胞再生システムを調和させることで発達障害の諸症状改善効果が報告されており、ホリスティック医療団体QSS JAPAN TEAMでは、これらの最先端医療を実践している。

^{*11} スペイン沖のVortex（渦巻き潮流）海水。
^{*12} 情報エネルギーを瞬時にロスなく集中させ、DNAを修復し、細胞を再生させる電磁波。
^{*13} R.Rifeが発見したがん細胞やウイルス・寄生虫を破壊する共鳴周波数。

おわりに

今後は個々の特性への理解をおもんばかり、生産性重視の定型発達を強制する社会医療システムを見直すとともに、自然環境との共生や、障害の有無にかかわらず共に学ぶインクルーシブ教育など、養育環境を見直しながら真のコミュニケーション疎通を高め合うことが望まれる。未来型統合医療の普及によって、神経・精神・魂の多様性が容認されるプリミティブに開かれた自閉世界への人類回帰を切に願う。



福田克彦 Katsuhiko Fukuda
医学博士。統合医療センター福田内科クリニック 副院長。山陰健康百寿プロジェクト・日本統合医療学会山陰支部にて、医療ツーリズムを通じた自然環境保全と地場産業の振興、伝承医療や郷土芸能の育成セミナー・学術大会を主宰。ホリスティックな量子エネルギー・再生医療を、自閉症や脳性まひ、進行がんや認知症などさまざまな神経・精神・運動器難病で実践。
<http://tougouiryou-fukudaclinic.com>